

肛門性格をめぐる

細 江 光

— 只今御紹介に与りました細江で御座います。予告にも書いて置きました通り、私は、性をフロイト的な広い意味に捉らえつつ、中でも肛門性格という問題に特に焦点を合わせ、具体的には谷崎文学を例に引きながら、論じて行こうと思っております。先ず最初に、前提となるフロイトの学説を簡単に振り返って置きましょう。

フロイトは、人間における性的なものを、まず、大人の性、我々が普通セックスと呼んでいる種類のものと、ただペニスやクリトリスなどが本来の活動を始める以前の幼児性欲の二つに区分します。更にフロイトは、幼児性欲を三つの段階に区分し、おっぱいを吸う事を中心とする口唇期（一歳半まで）、大便の排泄を中心とする肛門期（二―四歳）、ペニス・クリトリスを中心とする男根期（三―七歳）に分けます。人間における性的なものは、これらの幼児性欲の段階を順次経過した後、思春期になって目覚めた性器を中心とする体制に再編成され、大人のセックスへと移行する訳ですが、その発達がうまく行かないと、種々な程度で様々な精神医学的症状が現れたり、口唇・肛門・男根期のどれかに偏った特殊な性格になったりする、と考えられています。

— これを人間の精神形成という観点から見ますと、口唇期の段階では、自己と他者との区別がまだかなり曖昧であり、セルフ・コントロールという事も殆ど問題になりません。それが肛門期になりますと、トイレのしつけが始まり、この時初めて人間は、欲望のままに生きる事を諦め、母親の命令に従って、自分の欲望を支配・制御し、時に

断念する事を学ぶのです。この自己支配の問題から、罪責感を産み出す「超自我」^{スーパーイゴ}の形成も始まりますし、支配と服従の問題から、攻撃性やサディズム及びマゾヒズムも生まれると考えられます。

この発達段階に固着する人間、つまり肛門性格の人間は、自然な欲望と、自分自身をコントロールしようとする超自我とが乖離し、強迫的な性格になります。素直に快楽を追求せずに我慢しようとする事、すべての物事を自分が決めた通りにきちんとコントロールしないと気がすまない事、等がその特徴です。また、超自我が強過ぎる為に、恥や罪の意識も強くなります。一方また、肛門期の幼児には、母親の言いつけを聞かずに、大便を出さずにおこうとする願望も強くありますから、人の言う事を聞かない強情・頑固な性格になったり、やりたい事とやるべきだと思ふ事の分裂から、同一人物が矛盾対立する二面性を示し、礼儀正しさと無礼、几帳面さとだらしなさ、吝嗇と浪費、優しさと攻撃性といった正反対の性格を合わせ持つとも言われています。

※

※

※

肛門性格をめくって

以上のような肛門性格の特徴を念頭に置いて、谷崎の生涯と文学を眺め渡して見ますと、思いの外に符合する所が多い事に気が付きます。

谷崎の芸術上の完全主義・凝り性、私生活における義理堅さ・礼儀正しさ・時間厳守、また『細雪』(S18)23)等からも感じ取れるように、年中行事や儀式のように型に填ったものを好む事なども、肛門性格の特徴です。谷崎のマゾヒズムも、強すぎる超自我と本来の欲望との間に強い葛藤が生じ、罪悪感が生まれる為、欲望を満たす時には同時に自らに罰を加えて罪滅ぼしをしようとする事と関係があると考えられます。谷崎の小説には、大小便への言及がかなり頻繁に出て来ますし、『廁のいろいろ』(S10)というトイレを論じた随筆も書いています。また、面白い事に、谷崎は生涯にわたって、便秘を非常に気にしておりました。⁽¹⁾ これらも、谷崎が肛門性格だった事を推測させます。

※ ※ ※

さて、もし潤一郎が、実際に肛門性格だったとするならば、そうなった原因は、一体何だったのでしょうか？ 私は、原因の一つは、母セキのトイレのしつけ方にあつたのではないかと想像しています。その事を幾らかでも裏付けてくれそうなものに、『少年の記憶』(T2)と題する回想があります。この中で、谷崎は五、六歳の頃、よく鉄道馬車に乗ったが、馬が途中で糞をするのを《少しも穢いと思はぬのみか、肛門の周囲の筋肉が奇妙に伸縮する工合を、面白さうに熟視するのを常とした。》と言ひ、また、泥を捏ねて《円形の土手を築いて、其の中へ放尿をし合つた後、又其の土を崩して弄んだが、それさへ穢いとは思はなかつた。》と回想しています。また、同じ文章の中には、次の様な一節もあります。

《五六歳の時分、私は毎晩母に促されて入浴するのが面倒でならなかつた。(中略)私はやれ石鹼しよばんが眼へ沁みるとか、やれ湯が熱いとかだ、を捏ねて、手足をバタバタ藻掻きつ、泣き叫んだ。「い、子だから大人しくするんだよ。阿母おつかさんは穢い子供が大嫌ひ！」など、欺し賺されても、私はい、つか、承知しなかつた。(中略)私には大人の清楚せいそ、汚穢きたがと云ふ意味は好く合点出来なかつた。》

この例からも分かるように、幼少時代の谷崎は、大小便にむしる愛着を示していて、親によって清潔さを強制される事には、全く納得していなかつたのです。

ところが、谷崎のお母さんという人は、また取り分け綺麗好きでありました。潤一郎の弟・精二が、『遠い明治の日本橋』に、次の様に書き残しています。

《私の母は病的に神経質だった(中略)母は綺麗好きで、便所から出ると、塩と軽石で手を三十分位ごしごし洗わなければ気が済まなかつた。冬になると指先がすっかり割れてささくれ立つたが、それでもやめなかつた。》

この様に糞尿に対する強迫的な不潔恐怖を示す母親が、息子に対してどういふトイレのしつけをしたかは、容易に

想像できるでしょう。⁽²⁾ 潤一郎は、大小便への愛着を断念するように強制された事が一種の外傷体験トラウマになっていて、その為に生涯にわたって大小便を復権しようとする無意識の願望を持ち続けた人だったのでないかと私は考えるのです。

※

※

※

大便は、社会にとつては単に嫌悪すべき無価値なものに過ぎませんが、肛門性格の人間にとつてはアンビヴァレントな存在です。つまりそれは、嫌悪すべきもの、抑圧すべきものであると同時に、触つてみたい、手に入れたいものでもある訳です。谷崎には、最初、嫌悪していた不潔なものを、何かの切っ掛けから、急に熱愛し始めるといふ例がありますが、これは谷崎の大便に対するアンビヴァレントの現われと解釈する事が出来るでしょう。

例えば谷崎は、関東大震災後、関西に移住した際の頃、『阪神見聞録』(T14)を書いて、大阪の人が満員電車の中で子供に大小便をさせる無神経さを罵倒していますが、⁽³⁾その後間もなく、大の大阪人鼻屎になって、大阪賛美の為に『私の見た大阪及び大阪人』(S7)を書きます。ところが、そこでも大阪の家の中の不潔さを言い、『江戸つ児は襦袢を着てゐてもふんどしと履き物だけは新しいのを誇りとしたと云ふが、あれでみると大阪人の下着類は定めし不潔であらうと察せられる。』と書いています。つまり谷崎は、大阪人が不潔だという認識を変えたのではなく、不潔な大阪人が好きになつてしまつたのです。

また、これは小説ですが、『アエ・マリア』(T12)という作品の主人公は、店に丁稚奉公をしている鈴吉という少年の足だけを、鈴吉の人格とは無関係に崇拜するようになります。それも、最初は畳の上に座っている鈴吉の《臀の下に重ねられてゐた黄色い足の裏》を見て、『なぜ人間にはあんな不作法な足なんてものがあるんだらうなあ』(中略)「せめて足袋でも穿いてゐたらいいのに」と、ひそかにその足を憎ん《でいたのに、《厭だくと思つてゐるうちにいつの間にかやらひよいと好きになつて、その《皮膚に黒いひびの這入つたむくんだ汚い足》を崇拜

するようになるのです。《臀の下》という位置や《黄色い》汚い《足の裏》という言い方から見て、足の裏は大便に近いものと考えられます。実際、人間の体の中で、足の裏は最も下の方にあり、最も下等で不潔な部位と言えるでしょう。だとすれば、足の裏を舐めてみたいなどと感じる谷崎のフット・フェティシズムもまた、肛門性格に由来する部分が大いのではないかと考えられます。⁽⁴⁾

※

※

※

ところで谷崎は、自分の理想とする女性に対しても、大便に対してと同様、憧れと恐怖の混在するアンビヴァレンツを、生涯にわたって示し続けております。これは、谷崎の人格は、肛門期にその基本構造が出来上がっていた為、後に女性に対して大人の性欲が生まれた時に、女性もまた大便と同じ様にアンビヴァレントな存在になってしまったからではないか、と考えられます。谷崎が、生涯にわたって女性を愛しつつ恐れ、性的快楽を追求しつつ、罪や死の恐怖に悩み続けたのは、一つには母セキに対するインセスト・タブーのせいだと考えられますが、もう一つには、谷崎にとって、女性は言わば大便そのものだったからではないか、と私は思うのです。

この仮説は、大胆に過ぎるように思われるかも知れませんが、谷崎には、自作の女性主人公を大便と結び付けようとする奇妙な傾向が、実際にあるのです。

例えば、『乱菊物語』(S5)と『少将滋幹の母』(S24~25)には、平中が本院の侍従の排泄物を見る有名な話が使われています。また『武州公秘話』(S6~7)では、武州公が便所に通ずる地下道を通じて、桔梗の方に会いに行く話や、的場大助が桔梗の方の糞溜の底で、『真に文字通り芳しい最期を遂げた』事などが語られています。『春琴抄』(S8)には、春琴について、『お師匠様は廁から出ていらしつても手をお洗ひになつたことがなかつたなせなら用をお足しになるのに御自分の手は一遍もお使ひにならない何から何まで佐助どんがして上げた入浴の時もさうであつた』と書かれています。つまり春琴のお尻の穴は、佐助が拭いたり洗ったりしていた訳です。『猫と庄造

と二人のをんな』(S 11)には、猫のリリーのフンシが、繰返し出てきます。そして庄造は、『僕リ、ーとは屁まで嗅ぎ合うた仲や』と自慢します。『細雪』が雪子の下痢で終わる事は有名ですが、妙子も赤痢になり、下痢が《余り頻繁なので、起きて、椅子に掴まつて、御虎子おまよの上へ跨がつたきりであつた》(下巻)と描かれています。⁽⁵⁾

以上は比較的穏やかな例ですが、もっと過激なものとしては、例えば『青塚氏の話』(T 15)のラストに、青塚氏と思しき人物が、由良子そっくりに作った人形の大便を自分の顔に掛けて喜ぶという話があります。また、戦後の『過酸化マンガンの夢』(S 30)には、洋式水洗便所の中で、他ならぬ自分の大便が女になるという顕著な例が見られます。『馬の糞』(T 14)と題する小説では、友人の細君を毛嫌にする男が、こんな女と結婚するのは《ピフテキの代りに馬の糞を喰ふ》ようなものだと言って、厭がらせをします。彼が嫌いな女性を《馬の糞》と呼ぶのは、彼にとつて女性はいい糞か悪い糞かどちらかであつて、いい糞なら食べてもいいと思つてゐるからでしょう。実際、戦後の対談『忘れ得ぬことども』(S 22)の中で、辰野隆が谷崎に《君は中学時代に、惚れた女ならクソでも食うつていつてたね》《今でもそんな気もちがあるかい》と聞くと、谷崎は《やア、ないこともないが……》と答えています。

『痴人の愛』(T 13-14)には、ダンス・ホールに行つた後、急にナオミに幻滅を感じ始めた讓治が、帰りの電車の中で、次の様に思う場面があります。

《ちやうど私の座席からは、彼女が最も西洋人臭さを誇つてゐるところの獅子ツ鼻の孔が、黒々と覗けました。(中略)此の鼻は(中略)まるで私の体の一部も同じことで、決して他人の物のやうには思へません。が、さう云ふ感じを以て見ると、一層それが憎らしく汚らしくなつて来るのです。よく、腹が減つた時なぞにまづい物を夢中でムシャムシャ喰ふことがある、だん／＼腹が膨れて来るに随つて、急に今迄詰め込んだ物のまづさ加減に気がつくや否や、一度に胸がムカムカ出して吐きさうになる、——まあ云つて見れば、それに似通つた心地でせう》

ナオミの鼻の穴は、恐らく肛門を象徴しています。讓治はナオミを、良い大便（ビフテキ）と思って食べていた所、実は馬の糞だったと分かって吐き気を催すのが、この場面でしょう。

『悪魔』（M45）には、ヒロインが鼻をかんだハンカチを、主人公がぺろぺろと舐める場面が出て来ますが、この場合も、鼻の穴は肛門に、鼻汁は鼻糞という言葉がある事からも、大小便に準ずるものと考えられます。

『少年』（M44）には、狐ごっここの場面があり、狐になったヒロインの光子が、狐の糞うんちと小便と称して、足で踏み潰した饅頭・鼻汁で練り固めた豆炒り・白酒の中へ痰や唾吐つばきを吐き込んだものを『私』や仙吉に食べさせます⁽⁶⁾。すると信一が、『今度はあべこべに貴様を糞攻めにしてやる』と言って、皆で光子の顔を餡ころ餅でぐちゃぐちゃにします。餡が大便の代わりになる訳です。作品の最後の方で、光子は仙吉と私を縛り上げ、額の上に蠟燭を載せて座らせませんが、この場面でも谷崎は、二人の顔を覆い尽くした蠟について、わざわざ『鳥の糞のやうに溶け出した蠟』という形容を与えています。そして、ラストで光子は、私や仙吉に『鼻の穴の掃除を命じたり、Dimeを飲ませたり』しますが、この『鼻の穴』も肛門の象徴でしょう。この様にヒロインの大小便を愛する一方で、愛するヒロインの顔を大便まみれにしようとする事は、谷崎の女性への愛着が、大便への愛着の延長線上にあるとでも考えない限りは、理解できないと思います。

『肉塊』（T12）という小説には、美しい白人女性・グランドレンの顔を、映画撮影の為に黄色に塗り潰す例があります。この場合の黄色い絵の具も大便と考えて間違いないと思います。『幼少時代』（S30→31）には、明治二十七年の地震の際、母の白い胸に筆で墨を黒々と塗り付けたという思い出話が出て来ます。恐らくこれは、実際には夢で、胸を墨で汚す事は、顔を絵の具で塗り潰すのと同様、大便を塗り付ける性的な行為の代理象徴となっているでしょう。

潤一郎は『痴人の愛』のナオミを浅草千束町の銘酒屋出身としたり、『母を恋ふる記』（T8）で自分の母を鳥追

いの姿で登場させるなど、ヒロインの出自を殊更、下賤なものにしたがる傾向がありますが、これもヒロインを不淨なもの、ひいては大便秘結び付ける為の設定と考えられます。

女の顔を絵の具でぐちゃぐちゃにする例は、『鬼の面』(T5)という小説にもありますが、この作品の主人公は、絵筆よりもむしろ短刀で、『餅を捏ねるやうに顔中を捏ね返して見』たいと考えます。『春琴抄』で春琴の顔を破壊する事も含めて、これらは顔そのものを大便秘結に返して捏ね返したいという事でしょう。

谷崎は、大便を捏ね回したいという欲望が強かったと見えて、『柳湯の事件』(T7)という奇妙な小説も書いています。この小説の主人公は画家で、ぬらぬらした物質——蒟蒻とろろや《心太、水飴、チューブ入りの煉菌磨(中略)とろ、肥えた女の肉体》等が大好きで、画家になったのも《さう云ふ物質に対する愛着の念が、次第に昂じて来た結果だらう》と言います。そして、自分の情婦に対しても、シャボンシャボンを顔に塗りたくったり、体中に布海苔をぶっ掛けたり、『鼻の孔へ油絵具をべつとりと押し込んだり』していじめます。ここでも鼻の孔は、肛門と同一視されておられ、油絵具やぬらぬらした物質は大便秘結であると考えられます。彼が油絵具を鼻の孔へ押し込むのは、大便秘結の肛門の中にあるべきだからでしょう。そして、この主人公は《肥えた女の肉体》も、ぬらぬらした物質、つまりは大便秘結と同列に並べているのです。谷崎が女性の肉体を大便秘結と同視し、女性の肉体を大便秘結の様に捏ね回したいと感じていた可能性は、決して小さくないと私には思われます。

『憎念』(T3)という小説では、主人公が丁稚の安太郎の鼻の穴を見て、『何と云ふ醜い、汚ならしい、鼻の孔だらう。』(中略)「人間の顔には、どうして鼻の孔なんぞが付いて居るのだらう。』」と思ひ、『飯を喰ふ時にはキツと其の恰好が眼先へちらちらして気持ち悪くさせ』るので、安太郎を憎むようになります。その憎しみは、『我れ我れが食事の最中に或る汚穢な事物を想像する時、何とも云へない、嘔吐を催すやうな不愉快』と同じだったと言います。明らかにこの例でも、鼻の穴は肛門と無意識に同一視され、それ故に嫌悪されています。

ところが、主人公には、この安太郎が手代の善太郎に暴力を振るわれた際の《歪んだ顔つきや、悶え廻る手足の恰好が甘い誘惑物のやうに一種不思議な牽引力を以て写つて居ました》。その為に主人公は、もう一度、安太郎が善太郎に殴られる所を見ようと、陰險な策略を巡らすのです。主人公はこの欲望を、《しんこ細工》を例に取つて説明しようと試みます。即ち、《あのグニヤグニヤした、柔かい、粘ツこい物質》《あの物質を自由勝手に伸ばしたり押しつけたり摘まんだりする手触りが、子供には無意識に面白かつたのです。(中略)私は全くそのやうな好奇心から、もう一遍安太郎のた打ち廻る光景を眺めたくなつたのでした。》と。谷崎は気付いていませんが、ここに語られている物質を捏ね回す快樂も、恐らくは、大便を捏ね回す快樂です。安太郎は、大便と同一視されるが故に、一方では吐き気を催させながら、他方では捏ね回してみたい欲望もそそのめるのです。《醜く、色黒く、而も豊かに肥えて居る彼の体質》が、擲つたり抓つたりしてみたい気持をそそるとされている事も、安太郎と大便との類似性を感じさせます。

老人性痴呆症になつたお年寄りは、しばしば自分の大便を手で掴んで捏ね回したり、食べたりするそうですが、これは、人間には本来そういう欲望があるのだが、普段は抑圧していて、痴呆症になると抑圧が取れるのだと考えられます。子供が泥遊びを好むのも、実は大便を捏ねる代わりであり、世の母親達がそれを厭がる本当の理由も、そこにあると思われれます。先に引用した『少年の記憶』の泥んこ遊びでも、泥は元々大便の代わりだからこそ、それに小便を混ぜようという発想が浮かぶのでしよう。⁽⁷⁾

※

※

※

ところで、谷崎の女性その他に対する趣味・嗜好には、生涯に少なくとも二回、劇的な変化が起つております。一回目は青年時代で、それまでは大変な優等生・学校秀才で、禁欲的な聖人・君子たらんとして居たのが、百八十八度方向転換して、性的快樂の探求者に変身した事です。二回目は関西移住後、それまでの西洋崇拜・白人女性崇拜

から日本回帰して、関西崇拜・古典的日本人女性崇拜に変わった事です。それでは、この二回の大変身の際に、谷崎の肛門性愛はどの様に变化したのでしょうか？

最初の優等生時代には、谷崎の肛門性愛は、もっぱら禁欲的に、我慢する力として機能していた事が、容易に想像できます。それでは、白人女性崇拜の時代にはどうだったのか。

結論から先に申しますと、白人女性崇拜の鍵を握っているのは「白」という色そのものであり、「白」は、一切の不潔なものを拒絶する色、大小便の完全なる否定と考えられます。一方、白人に対してしばしば日本人の象徴とされる色は「黄色」でありますが、谷崎にとって「黄色」は糞尿の色だったと思うのです。

西洋崇拜の時期、谷崎は黄色い日本人を軽蔑していますが、例えば『為介の話』(T15)という日本回帰直前の中絶作品では、アメリカ風の白いズボンと白靴の流行が日本人を尚更醜くすると書き、また、不愉快な大阪の新聞記者を描写するのに、彼の《汗でぬらぬら光つてゐる襟頸や、垢づいたカラー、曲つた蝶結びのネクタイ》《泥だらけな白靴》等の不潔さを指摘し、更にその上、彼の《菌糞の附いた黄色い歯》を見て吐き気を催したと書いています。しかも主人公は、二人の新聞記者の内、比較的《色白》で、《白靴》も《汚れてはゐたけれど踵が曲つてゐな》い方の新聞記者を選び、彼をこれ見よがしにえこ鼻戻して見せるのです。ここでは明らかに「白」は清潔で優れたもの、「黄色」は不潔で嫌悪すべきものとなっています。

ところが、日本回帰後に書かれた随筆『懶惰の説』(S5)の中では、谷崎は逆に《清潔と整頓を文化の第一条件とするアメリカ人》を揶揄するようになり、《今にアメリカ人は鼻の穴から臀の穴まで、舐めてもいゝやうにキレイに掃除をし、垂れる糞までが麝香のやうな匂いを放つやうにしなければ、真の文明人ではないと云ひだすかも知れない。》と言ったり、ハリウッドの映画俳優たちの《白い汚れ目のない歯列を見ると、何となく西洋便所のタイル張りの床を想ひ出す》と言ったりします。そして、便所をひどく汚くする中国人への共感を語り、《八重歯や

茄子齒が失われて行く事を嘆き、老人の齒は《煙草のやにで黄色く汚れて》いる方が、《皮膚の色ともよく調和して、のんびりした、悠悠々迫らざる感じを抱かせる》と主張します。ここでも「白」は明らかにトイレの清潔さと結び付けて考えられています。谷崎は日本回帰すると同時に、「白」を排斥し出し、それまで嫌っていた「黄色」を弁護し始めるのです。

谷崎には、西洋崇拜と日本回帰の問題を直接にテーマとして取り上げた『友田と松永の話』(T15)という小説があります。その中で、《黄色い顔》の日本人・《黄色い国》日本を嫌ってパリに渡った西洋崇拜の主人公・松永が、日本回帰する切っ掛けも、愛人スーザンの真つ白な肌が、何故だか急に恐くなつて来た事でした。そして、間もなく松永は、《女の肌の色も、真つ白いのよりも黄色が、つてゐる方が、和やかであり(中略)真に自分を心の底から労つてくれるやうな気が》し始め、日本の事を《想像したゞけでも荒んだ神経が静まるやうな感じを覚え》、とうとう日本へ逃げ戻つて来るのです。

ところで、日本が懐かしくなり始めた時、松永の耳元には、次の様な囁き声が聞えて来ます。

《此のピカピカしたガラスや金属の食器でもつて物をたべて旨いと思ふか? 此のテーブル・クロスはどうだ? 此の磁器の皿はどうだ? 成る程清潔には違ひないが深みもないぢやないか。》

ここで清潔な洋食器の事が出てくるのは、西洋および「白」が清潔の象徴であるからに違いありません。松永は、西洋の清潔な白さに追いついて、日本に逃げ戻ると言つても過言ではないでしょう。

同じく日本回帰をテーマとした作品『蓼喰ふ虫』(S334)でも、明らかに不潔なものが復権されようとしています。例えば、ヒロインのお久は、古風な京女で、茄子齒と八重齒があり、ハイカラな美佐子はそれを《不潔で野蛮》と酷評しますが、『懶惰の説』の谷崎同様、主人公の要は《さう云ふ非衛生的な齒を治療しようとしてもしないと》ころに》心を惹かれます。淡路で人形浄瑠璃を見る場面では、見物席の通路で子供に小便をさせる母親が描かれま

す。『阪神見聞録』でなら、罵倒の対象とされる筈のようですが、ここでは牧歌的などかな雰囲気を強めるのに役立てられています。また、美佐子の父は、谷崎の『廁のいろいろ』と同じ『雪隠哲学』を説き、お久に糞を使わせています。『春琴抄』の春琴もそうですが、お久は絶えず顔に鳥の糞を塗りたくっている訳です。そして、ラストでは、白いタイル張りの浴室とは対照的に不潔そうに見える薄暗い長州風呂に入って、お久と結婚したような気持になります。この『蓼喰ふ虫』という小説に安らぎが満ち満ちている事と、こうした不潔の復権とは、恐らく無関係ではありません。

日本回帰後の谷崎の美意識のエッセンスとでも言うべき随筆『陰翳礼讃』(S819)にも、同様の現象が見られます。この中で潤一郎は、『日本の廁は実に精神が休まるやうに出来てゐる』と言ひ、白いタイルを張り詰めた西洋式のトイレにすれば『清潔には違ひないが』、『精神が休まらな』と言ひます。また『西洋人は垢を根こそぎ発き立て、取り除かうとするのに反し(中略)因果なことに、われ／＼は人間の垢や油煙や風雨のよごれが附いたもの、乃至はそれを想ひ出させるやうな色あひや光沢を愛し、さう云ふ建物や器物の中に住んでゐると、奇妙に心が和やいで来、神経が安まる。』と言ひます。日本人全員がそうであるかどうかはともかく、少なくとも谷崎にとっては、大便、或いは大便秘的な不潔なものが、心に安らぎをもたらすのです。谷崎の場合、これは、母によって清潔を強制される以前の乳児期にまで幼児退行したいという願望の現われでもあります。⁽⁸⁾だから谷崎は、『廁のいろいろ』で、

『便所の匂には一種なつかしい甘い思ひ出が伴ふものである』と書いています。

「白」は、大便を抑圧する強迫的な色です。そして、大便を強迫的に抑圧するのは谷崎の母セキであり、清潔好きな西洋人です。しかもセキは、大変色の白い美人でした。ですから、西洋崇拜時代の谷崎の中では、母セキと「白」と白人女性は、一つに混じり合い、愛すべきものであると同時に、大便を抑圧する恐ろしいものともなっていたのでしょう。

しかし、日本回帰後の谷崎と言えども、セキを否定したり、女性の白い肌の価値を否定する所までは行きませんでした。『陰翳礼讃』の中で谷崎は、白人と日本人の肌の色を比較して、『日本人のはどんなに白くとも、白い中に微かな翳りがある。』と言い、その『翳り』を『清冽な水の底にある汚物』(どす黒い、埃の溜つたやうな隈)『薄汚い蔭』『薄墨のしみ』等と言ひ換えています。この黒い汚物は、大便のメタフォアでしょう。だから谷崎は、黒人の血が少しでも混じった混血児を徹底的に追求し排除しようとした南北戦争当時の白人達に、共感を示すのです。

『陰翳礼讃』に於いて谷崎は、『われ／＼の先祖は、明るい大地の上下四方を仕切つて先づ陰翳の世界を作り、その闇の奥に女人を籠らせて、それを此の世で一番白い人間と思ひ込んでゐたのであらう』と書いています。つまり陰翳は、純白でない日本人を、可能な限り白く見せる便法として礼讃されているに過ぎないのです。ところが、同じ『陰翳礼讃』の中で谷崎は、トイレに関して、『ああ云ふ場所は、もや／＼とした薄暗がりの光線で包んで、何処から清浄になり、何処から不浄になるとも、けぢめを朦朧とぼかして置いた方がよい。』と述べています。だとすれば、陰翳で包み隠さねばならぬ日本女性の純白ならぬ肌もまた、一種の不浄、即ち大便に他ならないのです。

しかし、汚物を含んだ白、大便を拒絶しない白は、谷崎にとって安らぎの色でした。『陰翳礼讃』の中で谷崎は、『唐紙や和紙の肌理を見ると、そこに一種の温かみを感じ、心が落ち着くやうになる。同じ白いのも、西洋紙の白さと奉書や白唐紙の白さとは違ふ。西洋紙の肌は光線を撥ね返すやうな趣があるが、奉書や唐紙の肌は、柔かい初雪の面のやうに、ふつくらと光線の中へ吸ひ取る。(中略) 西洋人は食器などにも銀や鋼鉄やニッケル製のものを用ひて、ピカピカ光る様に研ぎ立てるが、われ／＼はあ、云ふ風に光るものを嫌ふ。』と述べています。ここで谷崎が、紙の肌あいについて語る語り方からは、谷崎が紙を、実は女性の白い肌のメタフォアとして語っている事が感じ取れます。西洋紙の光線を『撥ね返す』肌は、大便を拒否する白人女性の肌であり、光線を『吸ひ取る』唐紙や和紙の肌は、大便を受け入れる日本女性の肌なのです。だからこそ、ここでも『友田と松永の話』同様、ピカ

ピカ光る清潔な洋食器が、比較の対象として呼び出されるのです。

谷崎が、白人女性崇拜から日本回帰し、黄色や大便を復権するのは、こうして見ると、谷崎が大便を徹底的に抑圧するような清潔な「白」の世界に憧れつつも、自己の内なる大便への願望を抑え切れなくなった結果と考えられます。谷崎は青年時代、聖人君子たらんとしていて、結局、我慢できなくなり、快樂追求へと方向転換していますが、白人女性崇拜は、言わば快樂追求路線内での聖人君子志向で、それがまた崩壊するという一種の振り子運動が起きているようです。そう思つて見ると、確かに白人女性崇拜時代の谷崎には、何か無理をして背伸びしている様な印象がありました。『支那趣味と云ふこと』(T II)は、その最も端的な現われだったのでしよう。

谷崎は白人女性崇拜の時期に、自分の小説の主人公を、頻りに悪人・背徳狂・悪魔主義者などと呼ぶようになりますが、これは、自己の内なる性欲を、悪として否定する超自我の働きが、この時期、特に強まって、良心の苛責を感じる事が、実際に多くなつていたからでしょう。超自我は、谷崎にあつては大便を抑圧する傾向が強い訳ですから、良心の苛責と大便の抑圧と白人女性崇拜とは、相互に切つても切れない関係にあつた訳です。⁽¹⁰⁾

以上の様に、肛門性愛という視点は、谷崎文学を考える上では、極めて有効であると私は考えます。

※

※

※

肛門性格についてのフロイトの仮説が正しいものであるならば、それは、谷崎に限らず、肛門性格の作家すべてに、それなりの有効性を示す筈であります。例えば、尾崎紅葉を例に取つて考えてみましょう。

紅葉は幼い頃から極めて几帳面で、真つ直ぐであるべきものが曲つていたり、角が円くなつていたりする事を嫌いました。また、例えば花の形をした菓子があつたとすると、その花びらが少しでも欠けていたりするのは、嫌つて見向きもせず、形が完全無欠でない限りは手も触れなかつたという事です(松原至文『明治文豪伝之内 尾崎紅葉』)。後年、文章に凝りに凝つた事も考え合わせると、紅葉には、肛門性格的な傾向があつたと考えられます。

ところで、肛門性格の人間には、お金を溜め込む人が多いと言われています。肛門期の幼児にとって、大便是母親に対する最初のプレゼントでありますから、大便とお金や黄金は、無意識の内に同一視され易いのです。事実、大便と黄金は、神話や童話の中でもしばしば同一視されます。谷崎の『陰翳礼讃』の中でも、『金屏風』や『能衣裳』等の美しさが取り上げられていますが、これらも実は、糞尿のメタフォアであると考えられます。⁽¹¹⁾

それでは、こうした事実を『金色夜叉』(M30-35)に当てはめて考えると、どういう事になるでしょうか。『金色夜叉』の貫一は、お金を軽蔑しているにもかかわらず、高利貸になつてまでお金を溜め込もうとします。これは矛盾した行動に見えますが、肛門期の幼児が母親に対して不満を抱いた際、強情を張つて大便を出す事を頑固に拒み続け、大便を溜め込む事で、母に復讐しようとするのと同じと考えれば、すんなり理解できるように思われます。貫一がこの様な行動に出る下地は、彼の生い立ちに求められます。貫一は早く両親に死なれていますが、この事は、心理的には両親によつて捨てられたのと同等の意味を持つからです。その貫一にとつて、宮は単なる恋人ではなく、失つた父母兄弟すべての身代わりでした。¹²⁾ところが、死んだ両親の代役を果たすべき筈の鳴沢夫妻が、その宮を富山唯継と結婚させようとし、宮もまた貫一を捨ててしまつたのです。ですから、宮および鳴沢夫妻に対する貫一の恨みは、普通の青年が失つた恋人に対して抱く普通の感情とは全く違い、むしろ、子供が自分に対して不当に冷たかつた父母の仕打ちを恨む気持の方に、遙かに近いものとなるのです。貫一は、『身は人と生れて人がましく行ひ、二も曾て犯せる事のあらざりしに、天は却りて己を罰し人は却りて己を許』(中編第七章)つたと考え、天と人に対して恨みを抱きますが、この場合の天は、父の正義を象徴するのでしょうか。正しくあるべき父も母も、不当に自分を迫害したという怨念——そこには、幼くして母を失い、父にも捨てられたように感じていた紅葉自身の怨念が込められていた筈です。肛門性格の紅葉は、その怨念を、大便としてのお金を溜め込むという形で表現したのです。

貫一は、高利貸を《極悪非道》《白日盗を為す》《悪事》と自ら《知つて身を墮した》(中編第二章) 訳ですから、その行動は、エリートになれる筈だった自分の未来を自ら葬り去る一種の自殺行為であります。⁽¹³⁾ それは、子供が、自分を愛してくれるべき筈の父母に期待を裏切られた時に、復讐的に自分自身を傷付けようとする行動と解釈してよいでしょう。勿論それは、幼稚な子供じみた行動であります。貫一という名前には、間抜けが一人という意味が込められている位です。⁽¹⁴⁾

貫一は、宮がどんなに反省し、謝罪しても許しませんが、それは、紅葉が、幼い自分を捨ててあの世へ行ってしまった冷たい母・庸よちに対する恨みを、宮に振り向けているせいでしょう。紅葉の死んだ母が帰って来ない以上、宮に対する恨みが晴れる事も、あつてはならないのです。

紅葉の腹案では、最後に怒りの解けた貫一は、《情死救済の広告をなして、五十余人の命を助け、一文無しになる》予定だったようですが、自分の財産を基金にして、その利子で救うとか言うのではなく、一挙に全部使ってしまったのは、溜め込んだ財産は大便に過ぎず、一挙に出してしまう方が、むしろ気持がいいからだと思われま(15)す。

以上、簡単ながら、肛門性愛という視点が、谷崎以外にも有効である事を示し得たと思います。

※

※

※

【以下補足】

顕著に肛門性格を示している作家として、もう一人、忘れてならないのは三島由紀夫であります。

三島の異常な幼年時代については良く知られていますが、例えば、まだ三島が赤ん坊だった頃、授乳は正確に四時間置きと決められ、授乳時間まで祖母によって厳密に決められていました。三島はこの祖母の命令に大人しく従うという訓練を小さい時から叩き込まれた結果、自分の自然な欲望を強く抑え込む肛門性格になったと考えられます。三島の母は、祖母からの隔世遺伝として、三島の《礼儀礼節義理立て報恩、人との約束の時間厳守、几帳面

さ」等を挙げていますが、これらはいずれも肛門性格の特徴を示しています。また、三島は《幼少のころから日本古来のしきたり、行動というようなものがとても好きで（中略）大人になってからも（中略）毎年の豆撒きの時など、先頭に立ち（中略）物凄い大きな声で、「鬼は外、福は内」とどなりながら豆を撒き、それから家族中に各自の年より一つ多い数の豆をひろわせて十円玉と一緒に包ませ、自分みずから近所の四つ角まで持って参り、帰りには掟に従い決して振り返らないという調子で（中略）この念には念の入った信心振りは死ぬまでやめ》（平岡梓『倅・三島由紀夫』）なかつたという事です。この様にしきたりや型を強迫的に大切にするのは、言うまでもなく肛門性格の特徴です。

その三島が自らの同性愛的傾向をテーマとして書いた『仮面の告白』（s24）の中で、《汚穢屋》の青年を、《私の半生を悩まし脅かしつづけたもの》つまり同性愛的欲望の《最初の記念の影像》としている事は、三島の同性愛がもともと肛門性愛から生じたものである事を示唆しています。そして、主人公が《糞尿汲取人》という職業に、《そこから私が永遠に拒まれてゐるといふ悲哀》を感じるのは、三島が糞尿まみれになる事を望みつつ、祖母によって強く禁止されていた事を想像させるのです。

『仮面の告白』の中では、金色のものがしばしば重要な意味を持っていますが、これは糞尿のメタフォアであると考えられます。例えば、生まれた時に主人公が見たと言う金色に光る盥の縁もそうです。主人公の憧れる《兵士たちの汗の匂ひ》も《黄金きんに炒られた海岸の空気のやうな匂ひ》とわざわざ言い換えられます。ラストのダンスホールのシーンでも、主人公が心を惹かれる青年について《腋窩のくびれからはみだした黒い叢が、日差しをうけて金いろに縮れて光つた。》という描写があります。中でも面白いのは、夏祭りの金の御神輿が出て来る事です。三島が神輿を担ぐ事に憧れ、後に実際にやらせて貰った事は有名ですが、金の鳳凰をてっぺんにつけた金色の神輿は、京都の金閣寺と余りにも良く似ております。小説『金閣寺』（s31）には、特に糞尿に関するイメージは出て来な

いようですし、作中では、金閣寺は概ね太陽と同一視されているようですが、太陽の金色が、三島において糞尿と結びついている可能性は、決して小さくないと私は考えます。

ところで、金閣寺を建てたのは足利義満ですが、彼は世阿弥を寵愛した男色家でありました。世阿弥は能の完成者で、谷崎が『陰翳礼讃』で能衣裳を賞賛している事は先に述べた通りです。三島も能が好きでしたが、ドナルド・キーン、小西甚一との座談会『世阿弥の築いた世界』（S45）で三島は、世阿弥の一番偉い所は、アンティノウスの様に容色が美しかった事だと言っています。やや大風呂敷を広げるならば、金閣寺も能も、いかにも肛門性格好み、同性愛者好みの対象なのです。

三島にはまた、戦後版『金色夜叉』でも呼ぶべき『青の時代』（S25）という小説があります。この小説では、主人公の父親がひどく几帳面な人物で、例えば『麦藁帽子』をかぶるにも、『帽子の紐を顎のところで几帳面に花結びに結んで』いて、しかも『その結び目の長さも左右が寸分ちがはない。』とされています。主人公は、この父親のせいでひどく几帳面な、肛門性格の人間に育ち、一高・東大に進学後、高利貸になるのです。

彼は、自分には自然さというものが欠けていて、普通の人生から疎外されているという感覚に悩まされ、次のように考えます。

《僕のやることなすことは、結局かういふ世界と自分の間に屹立してゐる硝子の壁を壊すに足りない。考へてもみるがいい、北極探険の大冒険家だつて一日一回は廁へ行かなければならぬだらうに、僕は用便については一言も触れてゐない探険記を鵜呑みにしたわけだ》

つまり、彼を普通の人生から疎外するのは、他ならぬ大小便の抑圧なのです。

ところで、この小説の最初には、文房具店にある巨大な鉛筆の広告模型を主人公が欲しがらる話が出て来ます。主人公の父は、この広告模型を主人公に買い与えた上で、無理矢理、海に捨てさせ、『ほしいものがあつても、男は

我慢をせなけりやならん」という肛門性格的な教訓を与えます。この鉛筆は、主人公が遂に自分の物に出来なかつた平凡な幸福の象徴として、作品の最後にも再び登場して来ます。三島は恐らく、ペンシルはペニスの象徴というフロイトの解釈を念頭に置いて、主人公が《贖物の英雄》（『青の時代』序）である事を象徴させるつもりで、作品の最初と最後に置いたのだらうと思われませんが、本当はむしろ大便の象徴とすべきでしょう。その形や、緑色に金文字付きという色合いもそうですが、それが張り子の模型であつて、現実には全く何の役にも立たない所が、いかにも大便的です。大便は、平凡な幸福の為には是非とも必要なものだったので、『青の時代』の主人公には、最後まで手に入らないのです。⁽¹⁶⁾

三島の文学は、概して作者が人工的・意志的に作り上げたものという印象が強いように思われますが、これは、自分自身をも作品をも、強く意志的にコントロールしようとする肛門性格の現われと考えられます。三島がボディ・ビルディングやボクシング・剣道等によつて、意識的に自己の肉体と精神を改造しようと企てた事も、文体を作家にとつてのザインではなくゾルレン（『自己改造の試み』）と考え、意志と鍛練によつて文体を支配しようとした事も、安部公房との対談『二十世紀の文学』（S41）で、『無意識というものは、絶対におれにはないのだ』と発言した事も、不感症の女に心を惹かれた事も、すべて肛門性格的な自己支配の願望の現われと言えるでしょう。

三島は晩年になつて、切腹に強い憧れを抱くようになりますが、私はこれも肛門性格と関係があると思います。何故なら、自殺の方法には、頭や心臓をピストルで打ち抜くとか、首を吊るとか、色々な遣り方がありますが、切腹はその中でも最も肛門に近い場所を破壊する死に方です。また、切腹は、大便の詰まったおなかを裂いてそこから排泄する行為とも、我慢に我慢を重ねて溜め込んだ肛門的攻撃性を一気に噴き出させる行為とも、解釈できるからです。切腹に関心を持ったもう一人の作家・森鷗外にも、肛門性格的傾向があり、だからこそ三島は鷗外を愛好したのではないでしょうか。

鷗外について詳しく語る時間がないのは残念ですが、鷗外が、医学の中で特に衛生学を研究対象に選んだのは、彼の不潔恐怖症の現われでしょう。また、彼の描くヒロインが、『舞姫』(M23)のエリスにせよ、『雁』(M44) T4)のお玉にせよ、貧家の出身でありながら、必ず身ざれいとされている事、高利貸への関心を『雁』で示している事、鷗外の自己抑制の強さなど、すべて肛門性格的傾向の現われと考えられます。

※ ※ ※

以上の様に、肛門性格という視点は、幾人かの優れた作家の研究に、少なからぬ貢献を成し得るものと考えられます。しかし、私が抱いている野心は、実はもっと遠大なものなのです。と申しますのも、肛門期は、自らの欲望に対するセルフ・コントロールの在り様を決定する時期ですから、肛門期にこそ、所謂「近代的自我」——近代に於ける自我と欲望の問題を解く鍵があり、更に言えば、肛門期の研究は、近代そのものの起源を解き明かす事にさえ繋がって行くと、私には思えるからです。近代の芸術とそれ以前の芸術を比較する時に我々が直感する差異——それを「近代性」と呼ぶならば、「近代性」は確かに「肛門性格」と繋がっている。——これが私の現時点に於ける見通しであります。

〔注〕

(1) 例えば『青春物語』に「私は日々下剤を用ひ、もし一回でも通じが止まると不安になった。」、『或る時の日記』に「毎朝あるべき筈の通じが一日止まつてもそれが気になる。」、全集未収録の昭和三十年十月二十一日付け川田順宛葉書(浪速書林古書目録H6/2)に、「便通のことは小生も毎日気に致しをり滞る時は下剤を用ひても通じるやうに致し居り候」とある。小説ではあるが、『異端者の悲しみ』にも「脳が悪かつたら便秘に氣を付けないといけない。先日医科の友達にこんな忠告を受けてから、彼は毎日湯水を飲んで、出来るだけ多く通じをつけるやうに努めて居た。」とある。潤一郎は健脳丸をよく飲んでいたようだが、当時この薬は、「便秘の人は常に服用せば中風又は卒中等を未発に防ぐ」と広告さ

れている。

- (2) 『異端者の悲しみ』ラストで、死んで行く妹が、『かあちゃん、……あたいたい糞うんこがしたいんだけど、此のま、していい、かい。』と母の許可を得る所にも、谷崎の母の不潔恐怖が窺われる。
- (3) 『為介の話』にも同様の罵倒がある。
- (4) 『江戸つ児』が、『ふんどしと履き物だけは新しいのを誇りとした』（『私の見た大阪及び大阪人』）事からも、足の裏（履き物）と大便（ふんどし）の類縁性が感じ取れる。
- (5) 『細雪』中巻に出てくる阪神大水害の描写も、『水は黄色く濁つた全くの泥水で（中略）黄色い水の中に折々餡のやうな色をした黒いどろ／＼のものも交つてゐる。』といった具合で、見ようによっては自然界の下痢とも考えられる。
- (6) 狐は体の色も大小便を連想させ、尻の穴がよく見え、菊井肛門と結び付けられる動物である。谷崎が女に化した狐に対する憧れと恐怖のアンビヴァレンツを示すのは、狐が大便を本質としている為かも知れない。
- (7) 『お才と巳之介』のラストに巳之介が泥まみれになる場面がある。これは「歌舞伎の中の残酷味」（『四季』）に語られている「黒手組助六」序幕の影響だが、大便まみれになりたいという谷崎の願望と関連しよう。『少年』で、少年たちが物置小屋で泥んこになるのも、同様に考えられる。
- (8) 谷崎の小説には、『痴人の愛』のナオミや『猫と庄造と二人のをんな』の福子、『細雪』のお春どんのように、不潔さを強調される女性が出て来る事があるが、これは清潔を強制されないという意味で、潤一郎には好ましいタイプだったと思われる。
- (9) 『細雪』で雪子の顔に現われるシミは、ラストの下痢同様、彼女を大便と結びつけるものであり、また、戦後の『鍵』（S31）の中で、大学教授の夫が、妻・郁子の体にシミがないか、残る隈無く調べる時、『腎ノ孔マデ覗イテ見』るのも、肌のシミが大便のメタフォアだからである。
- (10) 佐藤春夫は、『潤一郎。人及び芸術』の中で、潤一郎の『寧ろ徳望者に近いやうな生活態度』等から、潤一郎の悪魔主義をシャラタニズムに過ぎないとしているが、『父となりて』等からも分かるように、潤一郎は実際に良心の苛責に苦しんでいたからこそ、作品の中で、その問題を取り上げたのである。
- (11) 谷崎は、『廁のいろいろ』で、倪雲林が作ったという蛾の翅を敷きつめた便器を絶賛しているが、それは、『金茶色の底光りを含んだ』蛾の翅が、大便を黄金に昇華する美的イメージになっているからであろう。なお、倪雲林が実際に作った

のは鶯鳥の羽毛を敷きつめた便器で、谷崎は聞き間違えから、勝手にイメージを膨らませて行ったのである。志賀直哉・谷川徹三ほかによる『書と画と庭園を語る座談会』（「瓶史」S12/1）参照。

(12) 『金色夜叉』中編第七章参照。なお、後編（七）の二で、貫一は孤児になった事が諸悪の根源だったと鰐淵直道に語る。続々編第貳章で塩原の景色を見た貫一が、『偶ま人中を迷ひたりし子の母の親にも逢ひけんやうに』感じ、夢に見たのと同じ百合を見て、『宮ははや此に居たり』と思う事が、宮との和解の予兆となっている。

(13) 日本には、古くから、成仏を拒否して生きながら鬼になるという生き方のパターンがある。貫一がそのパターンを踏襲している事は、『金色夜叉』という題名からも明らかである。

(14) 『金色夜叉』続々編（二）の二で、貫一が『宿帳を御覧、東京間拔一人と附けて在る』と言う通り、確かに間貫一は「間貫け一」とも読める。

(15) 例えば、有島武郎が自分の財産を完全に放棄しようとした事も、宮沢賢治が財産に対して否定的で、日蓮宗のような極めて攻撃的な宗教に心酔した事も、彼らに肛門性格的な傾向があった事を示すものと考えられる。

(16) 『青の時代』には、この他にも、父に部屋に閉じ込められた主人公が、便意を催した為に降参する話や、ドイツ哲学を廁がついていない大建築に譬えて非難する所など、肛門性格に関連する部分が散見される。

【付記】 本稿は、平成六年十月二十三日にお茶の水女子大学で行なわれた日本近代文学会・秋季大会のシンポジウム「性」という規制」において、「肛門性格をめぐる」と題して口頭発表したものの原稿である。ただし、シンポジウムでは時間が足りなくなつたため、本論の一部は省略し、予定していた補足も全く断念せざるを得なかつた。